Dear地球民

第１５号
1995年12月発行

編集発行ゆがわら国際交流協会
〒259-03　神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1
湯河原町商工会内　☎0465-63-0111

第10回
やっさ国際交流

10年目を迎えた、ゆがわら国際交流協会のホームステイプログラム「やっさ国際交流」は、７月30日から８日間、ブラジル、韓国、台湾、中国、タイ、オーストラリアの18名の青年を招いて行われました。留学生たちは、それぞれ湯河原の家庭で、ホストファミリーと一緒に生活しながら、日本の文化、習慣を学びました。観光客としてではなく日本に接し、表からでは分かりにくい、日本の素顔を知ってもらえたことと思います。ホストファミリー、留学生とも、同じ「地球民」として、お互いの、同じところ、違うところを、じっくり見つめてみる機会にもなったのではないでしょうか。小さな相互理解が、大きな国際交流の第一歩。言葉の壁を乗り越え、広い心で、この小さな相互理解に取り組んでくださったホストの皆様、応援いただいた町の皆様、ありがとうございました。

何回か、ホストファミリーを引き受けていただいているご家庭から、「外国の方たちとの交流を通じて、我が家の子供達が、自然と、日本以外の世界に目を向けるようになっていることを感じ、親として、嬉しく思っています。」という感想を寄せていただきました。スタッフにとりましても、何よりの励みの言葉となりました。

福浦、醍醐院にて。ご住職様のご厚意で、座禅、お茶、生け花を体験しました。「ちょっと緊張しちゃうなあ。」左より、朴さん(韓国)、リム君(オーストラリア)、タチアナさん(ブラジル)

1995 第10回 やっさ国際交流
ホストファミリー&留学生

中村 てる子(吉浜)
ウェンチェン・リム(オーストラリア)

尖 英雄(吉浜)
マルガリータ・セイコ・オクモト(ブラジル)
林 玉玲(台湾)

竹林 徹雄(福浦)
ネイレ・ノリエ・シロマ(ブラジル)

石水 裕(中央)
ドウワンカモン・ナ・ラノン(タイ)

服部 一男(土肥)
劉 怡君(台湾)

佐々木 武彦(吉浜)
呉 佳怡(台湾)

浜野 ゆかり(吉浜)
タチアーナ・フェレイラ・タチワ(ブラジル)

前田 正義(吉浜)
高 潔(中国)

土屋 誠一(城堀)
キャサリン・コウジョ・ホドリーゲス(ブラジル)

柏木 光之(鍛冶屋)
権 成育(韓国)

福田 義徳(福浦)
エリーゼ・ヤヨイ・ワダ(ブラジル)

柏木 英一(宮上)
敖特根巴雅尔(中国内蒙古)

南 スージー(城堀)
李 始庚(韓国)

内藤 信之(鍛冶屋)
李 慧媛(韓国)

瀬野 由紀(吉浜)
ジャイミ・アキト・ウメハラ(ブラジル)

高橋 賢次(土肥)
朴 廷原(韓国)

奥村 章夫(吉浜)
アナ・パウラ・シャワラ(ブラジル)

☆☆☆☆☆第10回やっさ国際交流スケジュール☆☆☆☆☆

7/30(日)湯河原駅にて留学生を出迎え　開講式
31(月)町内バス見学とやっさ踊り練習
浄水センター、昇栄堂味楽庵(和菓子作り見学)
万葉公園、見番(芸妓さんの練習風景を見学)
幕山公園、東台福浦小学校
8/ 1(火)吉浜海岸にて花火大会見学
2(水)やっさパレード参加
3(木)福浦醍醐院にて日本文化の学習会
(座禅、生け花、茶道を体験)
5(土)手作り料理を持ち寄ってお別れパーティー
6(日)閉講式　駅ホームで見送り

8日間の思い出を胸に... また会いに来てね!

•••••ホストファミリーと留学生の感想文から•••••

やっさ国際交流があるということは、知っていましたが、私たち家族が参加することは、半分は信じられない事でした。エリカちゃん（李 慧媛 － ｲ･ﾍｳｫﾝさん、韓国）が来る前は、家族で話し合って、楽しみにしていました。駅から商工会、そして自宅へ、いよいよ生活が始まりました。スケジュールを通じて、忙しい日々が過ぎていきました。子供達も、せっかく慣れたのに、もうお別れの日を迎え、「どうして帰っちゃうの？」なんて、今はもう家族の一員として見ているようです。生活の違い、食事の内容、様々な違いの中でも、共通する点を探して暮らしてきました。エリカちゃんには、もっともっと観光させてやりたかったと思いました。我が家は子供が小さいので、なかなか思うようにならなかった事を、謝ったりもしました。エリカちゃんは、賢い女性ですから、何でも飲み込みが早く、自分の意見はハッキリ言ってくれました。これからも、いろいろな勉強をして、ステキな女性になってほしいと思います。子供達も私達も、素晴らしい時間を過ごせたことは、忘れることはないと思います。ありがとうございました。

［ホストファミリー、内藤　妙子］

湯河原での一週間は、本当に楽しかったです。家族と話したり、日本人の日常生活を体験したりすることによって、お互いに両国の文化や、習慣を、理解しつつありました。湯河原に来る前は、日本人が冷たいという観念を抱いていました。しかし、湯河原の人々の心が温かいので、私の考えが随分変わりました。湯河原の一週間は、私の一生の思い出になりました。今度よければ、ぜひもう一度、湯河原に伺いたいと思います。湯河原の皆さん本当にありがとうございます。　［高 潔（ｺｳ･ｹﾂ）、中国］

モンゴルと中国のきらびやかな民族衣装で、お国の歌を熱唱。お別れパーティーにて、オットホンバイラ君と高さん。

ホームステイは、本当にすばらしかった。私は、沢山のことを学びました。日本の家族が、どんなふうに生活しているか、そして、日本の文化や習慣を。日本のライフスタイルを学ぶには、日本の家庭で家族と生活を共にするのが一番だと思います。こんなに素敵だなんて、思っていませんでした。　［タチアーナ・フェレイラ、ブラジル］

我が家には、20才と15才の息子がおりますが、韓国の成育(ソンユク)は、たった一週間のホームステイで私達の息子のようになりました。韓国という国に対して、私達は無知でした。心を近づけようとしなかったことを反省しています。でも、成育のおかげで、来年韓国へ行こうと考えています。またひとつ、言葉へのチャレンジが始まります。今回は、スージー先生の所の李始庚、佐々木さんの所の呉佳怡、柏木英一さんの所の敖特根巴雅尔、そして林玉玲、我が息子成育、この子供達同志も深く国際交流ができたように思えます。たどたどしい日本語で、お互いの話を理解し合うことは、努力のいることだと思いますが、皆、本当にがんばっていますネ。［ホストファミリー、柏木　光之］

今度のホームステイは、言うまでもなく本当に楽しかった。湯河原のやっさ国際交流の皆様に、心から感謝しています。湯河原は、きれいな町で、ここに住んでいる人は、心の優しい、親切な方々でした。私は、柏木のおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんに親切に扱っていただいて、本当に自分の親元に戻ったような感じがしました。どこへも行きたくないけれども、帰らなくてはなりません。この一週間は、あっと言う間でしたけれども、お父さん、お母さんたちには、どれほど迷惑を掛けたか、私にはよく分かっています。ですから、お父さん、お母さんたち、特に私のおじいちゃん、おばあちゃんのご一家、ここで、お礼として、私の気持ちを受け取ってください。どうもありがとうございます。本当にお世話になりました。また必ず伺いますので、どうぞよろしくお願い致します。　［敖特根巴雅尔（ｵｯﾄﾎﾝﾊﾞｲﾗ）、中国内蒙古］

お誘いをいただいての、初めてのホスト！あれこれ思い悩んだのも嘘のようなすばらしい一週間！世界が少しだけ小さくなりました。私の子供の佳怡(カイさん、台湾）はもちろん、心暖まる留学生達が、今はかわいくて、かわいくて仕方ありません。幸福な楽しい思い出を作って頂いた留学生はじめ、手とり足とり御指導頂いた柏木光之様ファミリー、そしてスタッフの皆様、醍醐院様に心から感謝を申し上げたいと思っております。この幸福な気分、しばらく尾を引きそうです。色々な言葉も少し覚えたカナ？台湾、韓国？？？何よりも家族の心が、一つになれました。主人の毎日嬉しそうな顔！子離れに少し時間がかかりそうです。すばらしい国際交流でした。本当に本当に有り難うございました。　［ホストファミリー、佐々木　洋子］

昇栄堂味楽庵では、作りたての和菓子と、お抹茶をご馳走になりました。ブラジルのキャサリンさん(左)とアナ・パウラさん。

とても楽しい一週間でした。でも、楽しいと言うより、やっぱりすごくいい勉強になったと思います。家族の人と、いろいろ話している間に、私は気付きました。年の差なんて、問題ではないことを。大切なのは心です。私もこれからずっと、日本でもブラジルでも、そういう心のふれ合いを大事にしていきたいと思います。青春とは、その心のふれ合いであり、年とは関係ないと、私は信じています。だから、いつまでも若いホスト両親に負けないように、頑張りたいと思います。[エリーゼ・弥生・和田、ブラジル]

日本語が話せるので、びっくりしました。韓国のことをいろいろ教えていただいて、ありがとうございました。このホームステイのおかげで、家族全員、またまた輪を広げました。また、家族の人数もふえました。楽しかったです。

[ホストファミリー、南 賢治、里茶土、台亜那]

高橋賢次様、三好様、

お元気ですか。あっという間に、一週間が過ぎました。今度の夏休みに湯河原に行って、本当によかったと思います。パパとママ、ふたりとも私にとっては、いつまでも忘れられない人になりました。今までは日本人といっしょに話したこともなかった私には、本当に、いい経験になりました。あまり飾らなくて、ありのままの日本の家庭の姿を見せてもらって、本当に楽しかったです。どうもありがとうございました。いっしょに見た花火と一生懸命踊ったやっさの踊りも忘れないでしょう。いつも熱心に写真を写したり、仕事をしたりしていたパパとママの姿は、私に、日本人をもっと深く感じることができるようにしてくれました。休みになったら、また行ってもよろしいでしょうか。今度は、韓国にも、ぜひ来てみてください。韓国の色々な所も、見せてあげたいです。また会う日まで、お元気で。さようなら。 [朴 廷原(パック・ジョンウォン)、韓 国]

湯河原に来たとき、「いい感じ」と思いながら、あっという間に一週間が経った。湯河原で、色々なことを初めて体験した。とてもおもしろかった。来る前は、お寺に住むのは厳しいと思っていたけれど、かえって方丈さんにとても親切にしていただきました。（ホストファミリーの尖さんは、吉浜の吉祥院さま）箱根、熱海、鎌倉など、色々有名な所に行きました。楽しかった。でも、一番好きなのは、河で泳いだことです。それから座禅。本当に、心からきれいになるような感じがしました。もし将来困ることがあったら、私は、必ず座禅をすると思います。みんな家族のように暖かい感じがしました。私は、心の中から感謝しております。ほかの人から、日本のどこが一番好きですか、と聞かれたら、絶対“湯河原”と答えます。　［林　玉玲（ﾘﾝ･ｷｮｸﾚｲ）、台湾］

お互い、第二カ国語ということで、不安もありました。しかし共に生活をすることで、言葉が少しであっても、言いたいことが分かるようになるのです。不思議なくらいです。家族のように接すること － その課題を守れたかは、私たちには分かりませんが、楽しく過ごせました。いい想い出がたくさんできました。大変で、疲れることもたくさんあったけれど、今は、やはりやってよかったなと思います。この機会を与えてくださった方々に感謝します。そしてホストの皆さんと、学生の皆さんが、いつまでも家族でいられますように。　［ホストファミリー、土屋　桃子］

湯河原でのホームステイは、とても楽しかった。ホームステイ先の両親は、私を家族の一員として扱ってくれましたし、他のホストファミリーの方たちやスタッフも、友好的でした。東京で生活しながら、一人では学ぶことのできなかった日本の文化について、たくさんのことを学びました。湯河原は、人々や、習慣について学ぶには、最適の場所です。次に大事だったのは、ほかの外国の文化についても、多くを学んだことです。
［ウェンチェン・リム、オーストラリア］

おかあさんは、本当にえらいと思った。家事だけではなく、おとうさんと兄さん達の面倒と、祭りと、いろんなすばらしい趣味も一緒にしていて、本当にすばらしい女性だと思った。それに汗をかくときも、国の母と似ていて、こちらのおかあさんを見ると、そろそろ四カ月会っていない母を思い出した。ちょっと悲しい感じがした。湯河原の天気は、台湾の南方とそっくりで、小さいころ過ごした、嘉義（台湾の南の町）の日本式の家のことを思い出した。夜、川の流れる音が、暗闇の中で聞こえて、私は、この音を是非東京に持って帰りたいと思っている。最後に、商工会の皆様と、最初から最後まで一緒にいた、兄さんに感謝を申し上げたいと思う。　［劉 怡君（ﾘｳ･ｲｰﾁｭﾝ）、台 湾］

【活動報告】

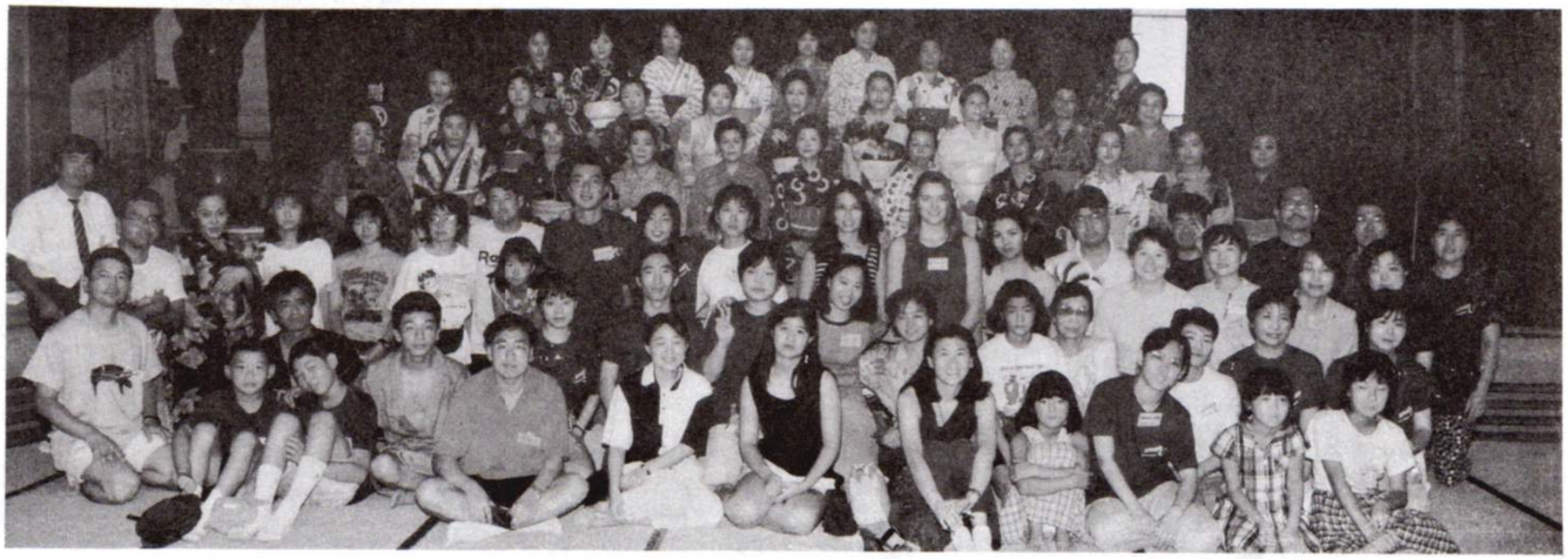
第3回国際交流フォト展 9/13～22 於:町立図書館および町役場ロビー

やっさ国際交流のショットも含めた、町の方々の海外との触れ合いの作品を展示。「地球民賞」に、早藤瑛美さんの「世界平和はスキンシップから」、「国際交流賞」に高橋二郎さんの「やっさやっさ」、特別賞に狩野利三郎さんの「世界はまるい」、奥村道子さんの「自国の証し」、ほか24の力作が入選しました。

募金協力　兵庫県養護連盟震災支援本部へ....¥56,100
（7月29日、海浜公園で催されたJAZZサミット会場にて募りました）

外国語講座
☆英　語（南スージー先生）前期6月、後期9月
☆中国語（露木　裕子先生）前期6月、後期8月より各10回授業が行われました。

【お知らせ】'95クリスマス会...12月22日（金）夜、スタジオ千夢にて



7月31日の町内見学会では、湯河原芸妓屋組合の「見番」を訪れ、芸妓さんたちの「やっさ踊り」と、太鼓・三味線・唄のお稽古を見学させていただきました。
粋なゆかた姿に、優雅な身のこなし。芸妓さんの熱演を間近で見ることができて、大感激でした。

いま、時代はエスニック

国際理解講座《タイ料理教室》レポート

11月23日(祝)、湯河原町商工会婦人部・ゆがわら国際交流協共催で、タイ料理教室が、開催されました。講師にタイのナット・ブンラングさんとペチャラット・タイピパットさんをお迎えして、36人の"にわかシェフ"が、腕をふるいました。本場タイの味が、どんなものかを知っていただくため、今回は、あえて日本風のアレンジなしで、すべてタイ式で挑戦してみました。

さあ、皆さん。準備はいいですか？

(左より)講師のペチャラットさん　通訳謙助手の石水裕さん　ナットさん

メニュー紹介

ゲーンキョワンーンガイ
タイ式の鶏肉入りグリーンカレー

トムヤンクン　甘くて、酸っぱくて、辛い、海老入りスープ。世界三大スープとして、ご存じの方も、いらっしゃるのでは？タイの人たちにとっては、日本の味噌汁のような、ごく日常的なお料理だそうです。

トートマンプラー　白身魚のすり身に、香辛料を足して揚げた、"薩摩揚げ"。タイの屋台の人気メニュー。

ヤムヌァ　ピリリと辛い、牛肉サラダ。
日本では牛肉は高級品ですが、タイでは、牛肉も豚肉も鶏肉も、ほぼ同じ値段。

THAILAND

おいしい！

ウ～ン、やっぱり辛い…

わが家でも、すぐに応用できそう。

さて、どんな味に仕上がったかしら？

THAILAND

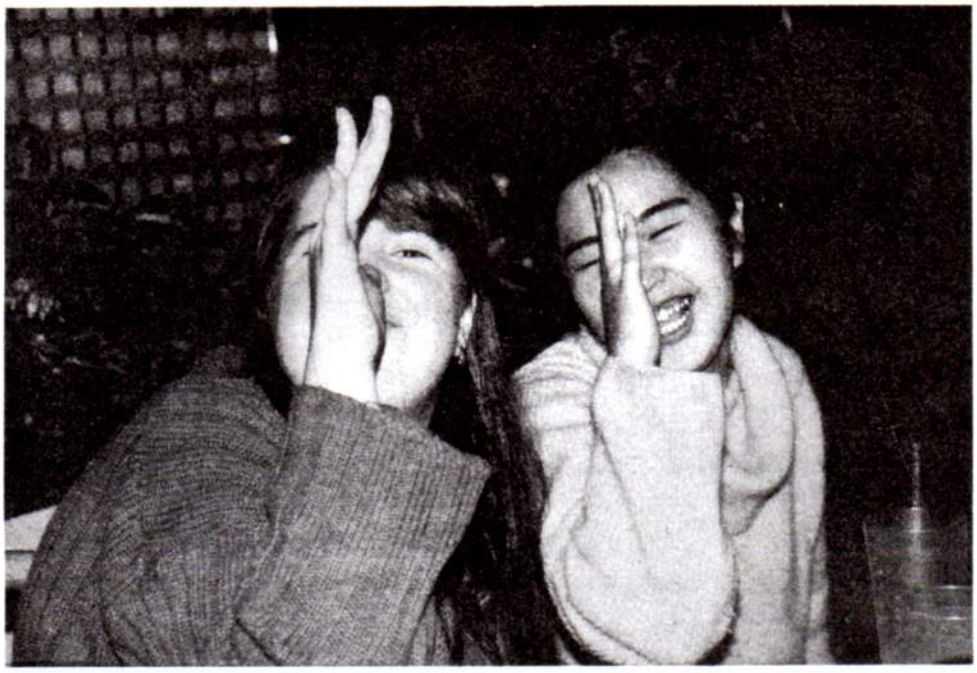
オーストラリアに友を訪ねて... (その2)

6月8日、私にとってこの旅行での最高の思い出となる日がやってきた。いよいよ友達の"ジェニー"に会えるっ!! 朝早くホテルを出て、メルボルンの駅へ向かう。9時15分の列車に乗り、約1時間の旅。列車の中、私は1年ぶりに彼女に会える嬉しさと、なぜか分からない緊張感でドキドキしていて、ほとんど口がきけなくなっていた。

私たち一行は、ジェニーの住む町"Geelong(ジーロング)"に到着した。列車を飛び降り、辺りを見回すと... "Hi, Jenny! I'm here!" 彼女は、去年より少し大人っぽくなっていた。そう声をかけたわりには、私は真っすぐジェニーのいる所へは行けずに、ブルック(彼女も第8回やっさ国際交流に参加した学生)の所にいって"Hi, How have you been?" 照れ臭くて... 次に、隣にいたジェニーのママ(通称ジェニママ)に、ご挨拶。"My name is..." "Yukiko! I know!"彼女は既に私をご存じでした。といった対面の後、ジェニーのパパ(以降、ジェニパパ)が、バスを運転してくれて"Geelong"の市内観光をすることになった。最初に訪れたのは、羊の飼育から毛糸で織物をするまでの段階を見ることができる"Wool Museum(羊毛博物館)"。その後、ジェニーの学校を見学した。彼女の学校は女子校で、小学生から高校生までが、同じキャンパスで勉強している。まず最初に、校長先生に挨拶をし、キャンパス内の探検へ。コンピューター室、調理室、音楽室、地理室など、各専攻によって分れている教室。一回り見学すると、ちょうど生徒達の"Lunch time"となった。ぞろぞろと廊下に学生達が出て来て、床に"べたんっ"と座り、ホットドッグやハンバーガーにかぶりついている。学生達はみんな人なつっこくて、"コ・ン・ニ・チ・ワ"と笑顔で話しかけてくれ、中には、中国人と間違え、"ニーハオ"なんて言ってくる子もいた。私も負けずに、"Hello! I'm from Japan!" と調子にのって英会話のレッスンを。"日本に行ったことがある"という子や、"日本語を勉強している"という子など、大騒ぎでしゃべっていると、ジェニーは隅っこのほうで、恥ずかしそうに"Stop it"と小声で言っていた。

学校の横にあるホットドッグ屋でLunchを済ませ、再びジェニパパの運転で市内観光へ。カンガルーと一緒にプレーできるというゴルフ場、ものすごい断崖絶壁に、グゥーっと広がる海といった絶景の"View Spot"、動物園を見学して、いよいよジェニーのおうちへ。今までは何軒か家も見えてはいましたが、ジェニーの家に近くなるにつれ、人影も見えなくなってきて、あるのは広ーい大地のみ。ブライヤント家(ジェニーのsecond name)の牧場は、湯河原中学校グランドの約7～8倍位の広さ。そのだだっ広い牧場は"乳牛・肉牛・羊"とそれぞれの囲いに分けられている。バスはどんどん牧場内を進んで、ジェニーは何度もゲートを開けたり閉めたり。バスが止まると牛たちがすぐ近くまで私達の顔を見に来た。あんなに近くで見たのは初めてでした。牧場を見学し終わると、ジェニママがお茶の支度をして、家で待っていてくれました。手作りのケーキが3種類もあって、紅茶とコーヒーでもてなしてくれました。家の中はカントリー風。ジェニーの部屋に行くと、ドアにべったり写真が貼ってありました。その中に去年の私の写真もあって、思わず感動。2人で去年の事を色々思い出しながら話をしました。

夕飯は、ジェニパパの案内で"シズラー"へ行きました。そこには、ブルックママと彼女のボーイフレンドが待っていて、湯河原の仲間、ジェニーとブルックの家族、みんなそろっての、にぎやかなDinnerとなりました。こうして、オーストラリア最高の思い出



オーストラリア、ジーロング市のレストランで、ちょっとおふざけの松野さんとジェニー「再会が、あんまり嬉しくて・・・」

のできた日は、あっと言う間に過ぎて行きました。

ジーロングでの朝を迎えた。前日とは対照的に、私の心はブルー。今日は、ジェニーにお別れを言わなければ... 部屋を出てロビーにいくと、ブルックは学校でテストということで、ブルックママが待っていてくれました。"Good morning, Mom!" 続いてジェニー＆ジェニママのご到着。そして、みんなで市内の美術館を見学に行きました。名前は定かではありませんが、オーストラリアの有名な画家たちの絵や、陶器などの作品がありました。やはりお国柄、自然をテーマとしたものが多かったように思えます。

美術館を出て、写真を撮ったり、店をのぞいたりしながら、今度はデパートに行きました。ちょうど"高島屋"と"そごう"を、たして2で割ったようなデパートです。最上階には、ファーストフードのお店がズラーッ。チャイニーズ料理などの店もあって、とにかく気軽に色々な食べ物がチョイスできて、とても便利に思えました。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎてしまうものです。お別れの時が近づいて来ました。ホテルに戻り、『少しでもジェニーと一緒にいる時間がほしい。』と、大急ぎで荷造りをして、1階へ行きました。ジェニーはちょっとさみしそうに、伊藤会長と話をしています。思わず私まで涙が出そうです。あっ、ピアノがある！弾いちゃえ！去年の国際交流、最後のパーティーで学生全員で歌い、ジェニーと二人大泣きした、"If we hold on together (ダイアナ・ロス)"。曲が流れると、ジェニーの目には、ポロポロ涙が... "No, please stop it..."

"Geelong" の駅までは、あっという間だった。2年後、彼女はもう一度日本に来たいと言っていた。私たちの滞在中、彼女はなかなか日本語を話さなかったけれど、頑張って勉強しているのだと思った。駅のホームでもジェニーは泣きっぱなし。絶対泣かないぞっと、意地を張った私も、ジェニママの優しい言葉と笑顔にノックダウン。いっぱいありがとう。国境を越えた友達との再会。そして、そのあたたかい家族に出会えたこと。この旅、最高の思い出となりました。　～つづく～　（松野　由紀子）

次号では、旅の最終訪問地、シドニーの町の様子をお伝えします。

今年は終戦五十周年ということもあって、色々な行事があった。戦争体験者が年々減っていくなかで、私の世代は、なるべくなら忘れたい気持ちの方が強いのは当然だ。

曾野綾子さんのエッセイに、「不謹慎なことと言う人もあろうが、私は今、八月十五日が早く過ぎてくれないかと、じっと待っている。・・・世間が一斉に騒ぐときほど、そのことを考えるのに不向きな時はない。ことに人の死や戦争などというものを考えるのに、今年の八月ほど浮ついているように思われる時はない。（産経新聞８月７日）　全く同感である。

行事の一つに映画があった。ＴＶ映画で、題名は「ビルマの竪琴」であった。

私の家族はそれをみて、おおいに涙にそそられたとのことであった。

私はあえて見ることをさけた。市川名監督の演出で、見応えのある作品だと評判もよかった。しかし、出演者の俳優諸君の豊かな生活と血色のよい顔ぶれが、どんなに名演技をしてもリアリティーが感じられないのだ。

戦後まもないある日、電車は身動き一つできないスシ詰めだった。著者竹山道雄の隣に立つている人が雑誌を手にまるめて読んでいた。彼はそれをむさぼるように覗き読みしていた。ビルマ全土に日本兵の白骨が累々と野ざらしになっているという四ページほどの記事だった。

その話が『ビルマの竪琴』の骨格になった。子供の雑誌『赤トンボ』に発表されたものである。それを一冊のフィクション（架空の小説）に仕上げた。あれを読んで、戦争世代の日本の男で、泣かなかった人は少くないはずだ。

シッタン河のほとりにたどりついて自爆する日本兵。イギリス兵も歌った。日本兵も歌った、「埴生の宿」。手に托鉢を持ち、肩にインコをとまらせた水島上等兵。寝仏のそとから彼に呼びかける戦友たちの声・・・「水島、一しょに日本にかえろう！」

新潮文庫からでているので、一読をおすすめしたい。

私がこのフィクション（架空小説）から得た感動を、私の体験からお伝えしたい。

日本の軍隊にあり得ない話しだからこそ余計に感動を覚えたのかも知れない。それはまず約五十人ほどの部隊をひきつれて、ビルマ戦線の敗走物語から始まる。食糧、弾薬、武器の補給もなく、ただ敗走につぐ敗走、そのような悲惨な立場におかれていた小部隊の隊長が音楽大学卒で、どんな逆境のなかにあっても、兵隊たちに軍歌ではなく、スコットランド民謡の「埴生の宿」「庭の千草」「ほたるの光」等などの歌を教えていた。しかも高度な二部、三部合唱までリードし、当時我々の世代は音符すら読めない筈なのに、リードの仕方によって、立派な合唱の技術を身につけていた。

三日前に既に日本は負けていたのも知らずに、メロディーが森の中から聞こえてくるのを、取り囲んでいたイギリス兵が聞いて、とても信じられないが、ともかく聞こえてくるのは、たしかに自国の故郷の歌には違いない、言葉は英語ではないが、メロディーは間違いなく「埴生の宿」であり、庭の千草であった。
それが殺し合いではなく、説得に成功し、戦争は終わったことを知らせるのに成功した。水島上等兵がお手製のビルマの竪琴で立派に伴奏し、より美しいメロディーになっていた。　そのあと、この小説では、頑強に戦争の終結を信じない片方の日本兵に、水島上等兵が、説得に行くのだが、どうしても信用しないまま、時はながれ、水島上等兵も帰って来ない内に、捕虜収容所に集められ、そこで水島上等兵の帰りを待つうちに、日本へ帰る日が来た。その時塀の外に水島上等兵によく似た、僧衣をまとい、竪琴を持った僧がいるのを発見し、「水島、いっしょに日本にかえろう！」と呼びかけるのだが、返事もしないで、消えてしまった。おそらく、それは間違いなく水島上等兵だったが、彼は、名もしれぬ、白骨になっている多くの日本兵への弔いのため、竪琴を手に、ビルマに残る決意をしたのだろう。
もともと、ビルマは信仰心の厚い仏教国で、その中の一人の仏僧として、托鉢を受けながら、永遠に弔いを続けていく姿を後に残して、多くの兵たちは日本へ帰国した。
　私はここで、誤解を受けたくないのは、戦争を美化するつもりで、このエッセイを書いたのではない。
戦争に参加した者としての嘘のない意見として、日本軍に、もう少し余裕が欲しかった。つまり、軍歌しか歌うことを認めない頑固さ、お前たちは二銭五厘で何時でも集められるが、馬は一頭八百円もするんだ、大事に扱えよ、今時通用しない人権という言葉すら聞くことはなかった。
敗戦という惨めな体験を引き吊りながら、残酷な話しばかりが、なお自分の心に残ってるいのは、癒しようもない。
しかし、これは他に転嫁しようもない、時代の巡り合わせに生れたものの、宿命とも言えるようだ。
何もかも豊かになり、平等という名のもとに、安全に過ごしてきたかに見える日本にも、そろそろ別の試練の時が来ているようだ。
次世代の責任問題とは言わないが、このフィクションを一読されれば、案外日本の将来の暗示が示されている面もあるような気がする。読む人の捉え方次第だが・・・
　峠を越したかに見える日本の景気、長い間、国旗、国歌すら否定し続け、徒に安穏な生活になれてきた現在までの日本の姿の裏には、多くのマインド・コントロールされた無実な兵隊を誰が非難できるのか、フイクションとは言え、それを責めることは誰もできない。
　終戦の日を迎え、今年は特に印象深いものを感じ、一筆した次第である。

（石井宏樹）